

Q10 発達障害への理解を深め、適切な対応をするにはどうすればよいか。

A： 通常の学級には、LD・ADHD・高機能自閉症等の発達障害のある児童生徒が6.3%程度在籍しているといわれている。特別支援教育では、従来の特殊教育の対象となっている児童生徒に加え、これらの発達障害のある児童生徒に対しても、一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行う必要がある。ここでは、発達障害の種類と支援のポイントを示すこととする。

【 発達障害への理解を深めるために 】

* 発達障害とは？

発達障害とは、人が育っていく発達過程において、脳の機能に育ちにくい部分があったり、うまくはたらかなかったりして、日常生活に何らかの支障をきたしているような状態を指す。発達障害者支援法（平成16年12月制定）では、次のような障害とされている。

自閉症・アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常低年齢において発現するもの。

(1) 自閉症・アスペルガー症候群・その他の広汎性発達障害

これらはみな自閉的な特性をもつものであり、「自閉症スペクトラム」というまとまりでみる考え方もある。自閉症スペクトラムの主な特徴は、次の3つである。

对人的な関わりや社会性の困難

- ・ 他人と関わろうとしない、また関わり方が変わっている。
- ・ 他人に共感したり、他人とやり取りすることが難しい。
- ・ 相手の視点で物事を考えることができない。

対人関係のタイプ

【 孤立型 】

- ・ 他人がいないかのように振る舞い、親愛な表情や感情を示さない。
- ・ 集団生活の場では友達に無関心であったり、逆に警戒したりする。

【 受動型 】

- ・ 人との関わりを受け入れることはできるが、自分からは人との関わりを求めない。
- ・ 従順で言われたことには従うので、誘われれば友達と遊ぶことができる。

【 積極奇異型 】

- ・ 他人に積極的に関わろうとするが、関わり方が一方的であったりする。
- ・ 相手や状況に関わりなく意志を伝えたり、行動したりするため奇妙な印象を与える。

コミュニケーションの困難

- ・ 自分から話しかけることが乏しい、交互に会話をすることが難しい。
- ・ 言葉の使い方がパターンのである。
- ・ 他の人が言った言葉の表面的な意味だけに注目してしまう。
- ・ 比喩的な表現、冗談、ユーモア、「～のつもり」の理解が難しい。

想像力の困難

- ・ 特定のものにこだわる、変化や変更を嫌がる。
- ・ 想像的な遊びや活動が苦手である。

(2) 学習障害 (LD : Learning Disabilities)

学習障害 (LD) とは、知的発達の遅れがないのに、学習に困難を示すような状態のことである。LD は教育用語とされており、文部科学省の報告書では次のように定義されている。

学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すもの。

この学習障害は、視覚や聴覚の障害、知的障害など他の障害が直接の原因であったり、環境的な要因によるものではない。気付きのポイントは以下の通りである。

聞く：聞き間違いがある。(「知った」を「言った」と聞き間違える。)

個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい。

話す：言葉につまったりする。

思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。

読む：文中の語句や行を抜かしたり、繰り返し読んだりする。

文章の要点を正し読み取ることが難しい。

書く：読みにくい字を書く。(字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない。)

限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書けない。

計算する：学年相応の数の意味や表し方についての理解が難しい。

簡単な計算が暗算でできない。

推論する：学年相応の文章題を解くのが難しい。

学年相応の図形を描くことが難しい。(丸やひし形などの図形の模写)

事物の因果関係を理解することが難しい。

(3) 注意欠陥多動性障害 (ADHD : Attention Deficit Hyperactivity Disorder)

注意欠陥多動性障害 (ADHD) とは、年齢や発達に比べて不注意、多動性、衝動性が著しく、社会生活や学業に支障をきたしている状態のことである。ADHD には、次の3つのタイプがある。

混合型：不注意と多動性 - 衝動性の両方がみとめられるタイプ

注意を持続させることの難しさ、感情をコントロールすることの難しさ、友達と協調的な関係をつくることの難しさがある。

不注意優勢型：多動を伴わず、不注意が目立つタイプ

ADHD と考えにくい子どもたちで、無気力、なまけものと思われてしまうところがある。

多動 - 衝動性優勢型：多動と衝動的行動が目立つタイプ

小学生1年生以下の子どもたちが中心で、学校では学習するようになって不注意が目立つようになると、混合型へ移行する。

不注意：注意集中の難しさ、気が散りやすい、忘れっぽいなど

多動性：座っていることができない、じっとしていない、しゃべりすぎなど

衝動性：質問が終わる前に話し出す、突発的な行動、順番を守ることが困難など

大切なのは

発達障害はその人の特徴(脳の機能のタイプ)であり、育て方や環境によって発現するものではない。どの特徴が強いのかは同じ障害でも一人一人違いがあり、成長によっても変化するため、困難や問題がある場合にはその子の特性や状態をよく理解して、それぞれに合った支援を行う必要がある。

なるべく早い時期から周囲が理解して、適切な支援を行うことによって、発達を促したり、本人のつらさや困難を軽減することが可能になる。

【 支援の手だての基本 】

(1) 安心して課題に取り組める環境の設定

- ・「できた！やってみよう」という気持ちを高めていくことが大切。

ポイント

落ち着いて安心して課題にチャレンジできる構造化された環境、やさしく支援してもらえる協力関係を整えること。

(2) 課題の分析と能力の評価

- ・難しいと思われる課題であっても、手順を分かりやすく示すことで達成につながる。課題を達成できるような道筋を考えることが大切。
- ・課題克服のための能力を「わかる（知識）」「できる（能力）」「かかわり（社会性）」に分けて評価し、つまずきを克服できるようにする。

例：「ドッジボールを楽しもう」

【知 識】ドッジボールのルールを知ってるか？

【技 術】ボールを投げることや、受け止めることができるか？

【社会性】ボールをやりとりして、みんなと楽しくできたか？

(3) 支援の見直し

- ・もっとやってみようという動機付けは高まったか？
- ・友達関係は広がったか？
- ・心は豊かになったか？

【 支援のポイント 】

(1) コミュニケーション

言葉の意味がわからなかったり、相手の気持ちがわからなかったりして、友達とうまくコミュニケーションがとれないときがある。

Q 1：質問されたときに、意味がわからないでオウム返しでこたえる時は？

わかりやすい言葉で質問する

Q 2：たくさん話しをすることができて、言葉だけでは理解することが難しい時は？

図や絵、文字やジェスチャーなどの視覚的な手がかりを用いて話す。

Q 3：友達と話しているときに、相手の気持ちを考えずに一方的に自分の関心のあることを話している時は？

相手の話を聞くことや交互に話すことを教える。

Q 4：思いやりの気持ちがあっても、言葉でうまく伝えることができない時は？

子どもの気持ちを受け止め、どのように言えばよいかを教える。

(2) 感覚過敏性

聴覚や触覚などの感覚が一般の人と異なる場合があり、強く感じると不安になりパニックになったりする。

Q 1 : ざわめきや特定の音が苦手な場合は？

耳栓をさせたり、静かな環境を整えてあげたりする。

Q 2 : 臭い、味に敏感なために食べ物が限定され、偏食になってしまう時は？

無理に食べさせず、調理方法を工夫して食べやすくする。

(3) かんしゃく・パニック

感覚の過敏さによる不快感や状況が理解できないこと、先の見通しがもてない不安感から、かんしゃくやパニックになることがある。

* パニックの時は安全に気をつけて、気持ちが落ち着くまでそっとしてしておく。

* 原因がわかる場合は、その原因となるものを取り除く。また、イライラしたときにどのように行動したらよいのかを教える。

* 活動の予測や状況が理解できるように工夫し、がんばって取り組めるように配慮する。

(4) 課題への取り組み

集中力の持続が難いため、一つの作業や課題を続けることが苦手な場合がある。また、一度にいくつもの指示が与えられると、何からやればいいのか、どこから手をつけていいのかわからなくなり、結果的に、作業や課題が中途半端になってしまうことがある。

* 作業や課題を取り組みやすいように分けて、一つずつ指示する。また、指示を忘れないように紙に書いて示す。

* 作業の課題や流れを図示すると、どのようにすればよいのかがわかるので、取り組みへの動機付けを高めることができる。

【参考資料】

・学童期の発達障害 - 特性に応じた理解と支援 -

栃木県発達障害者支援センター ふぉーゆう

・一人一人の教育的ニーズに応じた支援のために
～ 通常の学級における特別支援教育の手引き～

栃木県教育委員会